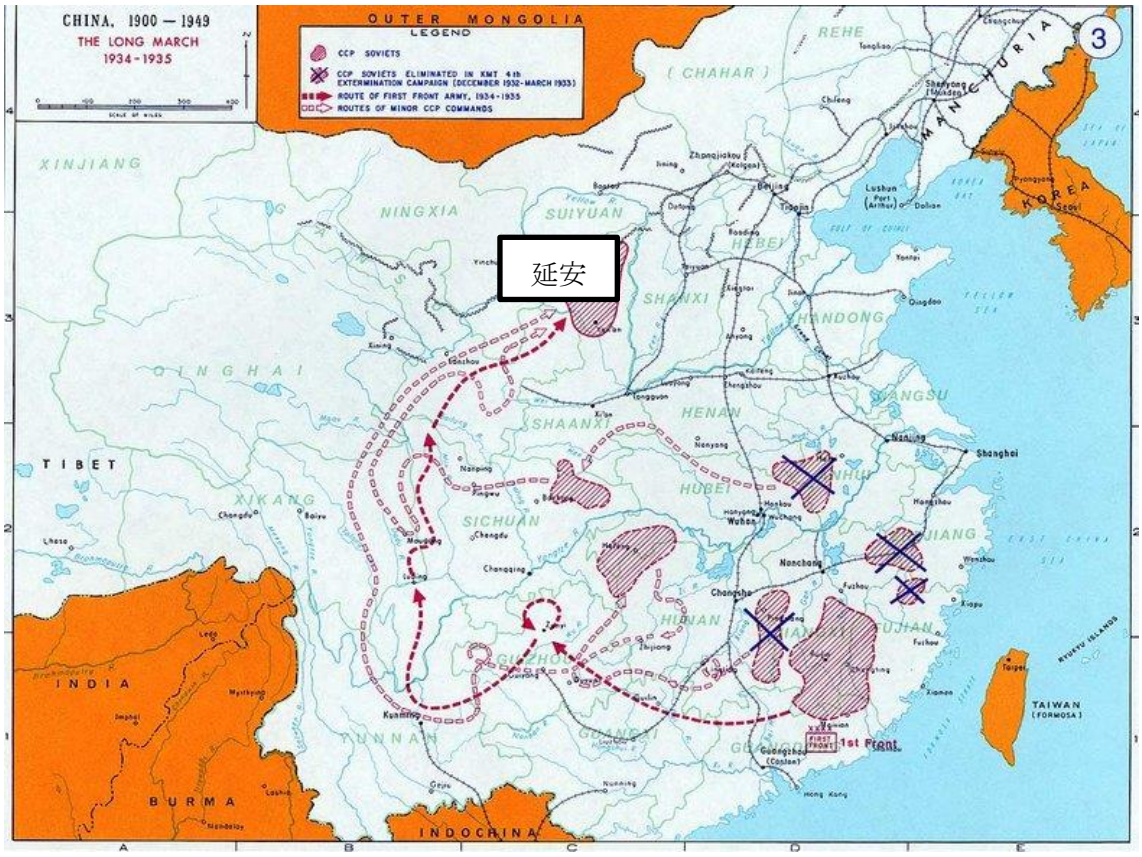
共産党の「台湾」　～陝西省延安市～

2013.4.09

香港　花木

蒋介石率いる国民党は、1949 年、国共内戦に敗れて台湾に逃れた。蒋介石は終生、台湾を拠点として大陸への反攻を掲げ続けたが、結果的に為し得ぬ夢と終わり、今では国民党は「台湾人の国民政党」として生まれ変わりつつある。

一方、これに遡ること約 15 年前、中国共産党は蒋介石率いる国民党の激しい攻撃を受け、ほぼ壊滅状態にあった。激しい攻撃によって、もともとの根拠地であった江西省～湖南省一帯から追い出された共産党は、1934 年 10 月から貴州省、雲南省、四川省から甘粛省といった人里離れた険しい山々を越える戦い、自らが「長征」と呼ぶ逃亡戦を余儀なくされた。1935 年 10 月、毛沢東と朱徳が率いる中国工農紅軍第一軍が陝西省延安郊外吴旗県の山中にたどりついたとき、その勢力は組織党員数わずか 300 人程度にまで減少していたとすら言われるほどだった。実際、蒋介石は当時、「共産党の討伐による中国統一までもはや 5 分前のところまで来ている」と語り、国民党による中国統一が間近いことに自信を示していた。当時の共産党にとって、陝西省北部山岳地帯にある延安市周辺は、その後 15 年を経て国民党が逃げ込んだ台湾と同じ、最後の砦となっていたのである。



↑　総延長 1 万 3000km に及ぶ長征のルート。

↑　延安市中心部のにぎわい。

↑　厳しい地形故に、山肌に穴を掘って住む「ヤオトン」住居がまだ多く存在する。

壊滅寸前だった中国共産党は、1936 年末に起きた西安事件（張学良・楊虎城らによる蒋介石監禁事件）をきっかけに息を吹き返す。西安事件をきっかけに、蒋介石は何故かそれまでの「日本と連携してソ連の脅威に備える」という政策を捨て、「共産党と連携して日本に対抗する」という政策（国共合作）へと大きく転換し、翌年 1937 年には日本と国民党との間で盧溝橋事件、第二次上海事変が発生して日中間は全面戦争の道に入っていくことになった。なぜ蒋介石は共産党を壊滅させずみすみす存続させたのか、なぜ国民党は対日連携対ソ対抗の道を捨てることになったのか、これらの謎の多くは 1936 年の西安事件で国民党と共産党の間で何が約束されたかにその源をさかのぼるが、本事件の関係資料は公開されておらず、関係者も一切証言することなく世を去った今、依然として謎となっている。

国共合作により一息ついた共産党は、延安山中から延安市内に移動、大きな司令部を構築し、ここで毛沢東は上海事変で難を逃れてきた女優・江青と知り合い結婚生活を送った。同様に、革命にあこがれて延安を訪れた若い女性は多く、共産党幹部の多くはこうしてやってきた女性たちと結婚したという。こうしてやってきた女性たちの中に、今回国家主席に就任した習近平氏の母、斉心もいた。

↑　毛沢東の住居跡にて撮影する中国人観光客。彼はここで江青と新婚生活を送った。（写真右上は延安時代の毛沢東と江青。）

←習近平氏の父、習仲勲氏のオフィスだったヤオトン（延安市内）

習仲勲氏の住居だったヤオトン。ここで都会からやってきた 13 才年下の斉心と知り合い、結婚生活を送った。習近平氏が生まれた 1953 年には既に両親は延安を去り北京に移っている。　→

◎延川県梁家河村

国民党が日本との戦いを行っている間、毛沢東は一貫して延安に居を構え動かなかった。1945 年、日本がポツダム条約を受諾し降伏した後、毛沢東はようやく延安を出て河北省西柏坡に移り、国民党との戦いを開始、勢いに乗って 1949 年には新中国成立を宣言する。大きな敵（日本）を国民党に退治させ、それにより疲弊した国民党を追撃して誕生したのが共産中国である。

毛沢東が去り、政治の舞台からいったん退いた延安だが、新中国成立後 20 年を経た 1969 年、再度中国政治史にその名前が登場する。毛沢東が文化大革命を発動して間もない同年 1 月、中学を出たばかりの 15 歳の少年がはるか離れた北京から年上の知識青年たちとともに、延安から 80km 離れた山間部にある梁家河村にやってきた。農村生活になじめず一度挫折して北京に帰ったものの、その後は志を入れ替えて再びこの農村に戻り、1975 年に清華大学入学のため離村するまで農民たちと共に寝起きし働いたこの人物こそ、昨年、中国共産党総書記に就任した習近平氏である。

梁家河村がある一帯は延安の東に約90km ほど入り込んだ山村地帯である。黄土高原が広がるこの地域は降水量が乏しく、トウモロコシを育てるのがやっとという地域で、最近でも 10 年ほど前までは食べるに事欠く農民が珍しくないほど貧しい地域である。（最近は灌漑が整ったのでスイカやナツメ等の栽培が盛んなようだ。）

今回、タクシーをチャーターして延安から梁家河に向かったが、中央の指導者が訪問しているという理由で、村から約 10km ほど離れた国道で交通規制が行われており、残念ながら村に入ることはできなかった。（習近平氏の総書記就任後、幹部の視察時に道路封鎖をしないという方針が出されたとされるが、実態は以前と何ら変わっていない。）

↑　梁家河村に入るための橋（手前）。新しい橋（後ろ）への架け替え作業中。

ただ、上記写真を見ても、このあたりの農村の厳しい環境が見て取れるのではないだろうか。実際、現代でも、中国の農村生活は非常に大変である。電気が通じ携帯電話も普及、

車も普及しはじめているとはいえ、一般の日本人がいきなり農村に行って生活を共にすることは簡単にできることではない。ましてや、今から 44 年前の貧しい中国における農村生活は想像を絶するもので、北京から移ったばかりの習近平氏は朝から晩まで続く厳しい農作業やノミ・シラミだらけの生活、乏しい食糧等になじめず、わずか 3 か月でこっそりと北京に戻ってしまったという。実際、当時下放された知識青年にはこうして農村になじめず逃げ出した者が相当多かったといい、年若い習近平氏もその一人だったのだ。ただ、北京に戻った後も居場所がなく、労働教育として下水道管埋設等をさせられながら、同時に母斉心の姉斉雲に諭され、再び思いを新たに自ら志願して同年末に梁家河村に戻った習近平氏は、5 つの関門を乗り越えることで人が変わったように農村生活に溶け込むようになったという。習近平氏自らが語るこの 5 つの関門とは、①ノミ・シラミの関門、すなわちノミやシラミに咬まれても痛みを感じない皮膚になった、②食事の関門、すなわちトウキビ団子のような農村の貧しい食生活に慣れた、③自活の関門、すなわち服の修理から料理まで何でも自分でできるようになった、④労働の関門、すなわち重い荷物を担いで長距離歩けるようになった、⑤思想の関門、すなわち貧しいヤオトンの生活になじむようになった、という 5 つである。こうして農民の言葉を話し、ノミ・シラミを恐れず彼らを家に招くようになった習近平氏は居場所を得て、彼らと親しく交わるようになれたということだ。

習近平氏が中国人の中で一定の人気を集めているのも、若いころに農村に入り込んで苦労した経験を持つことが大きいように見受けられる。こうした苦労が習近平氏にとって大きな資産になっていることは間違いないだろう。ただ、こうした厳しい経験をしたのは習近平氏の世代までで、その後の世代は改革開放と軌を一にして右肩上がりで成長した中国しか知らないと言っていい。現在の中国では一人っ子政策の影響もあり、子供、特に男の子は極端に甘やかされて育っており、親が金持ちだったり権力があったりする場合は、傍若無人な振る舞いも目につく。経済発展がそのまま人間の資質向上につながらないのは確かで、この問題は今後の中国及び中国と交わる国々にとっても大きな問題になっていくだろう。

←「中央幹部の視察」を理由に閉鎖された梁家河村への入り口。